



Title	対象と自己意識 : 「三段の総合」における自己意識
Author(s)	壹岐, 幸正
Citation	メタフュシカ. 2004, 35(2), p. 113-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4978
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対象と自己意識

— 「三段の総合」における自己意識 —

壹岐幸正

『純粹理性批判』の「純粹悟性概念の演繹」は、純粹な悟性概念であるカテゴリーがいかんして経験に妥当し得るかの証明を目的とする。それは純粹な自己同一性の意識である「超越論的統覚」の概念によってなされる。ところが、意識の持つこの自己意識であるという性格(反省的・自己言及的性格)は、一見十分な根拠づけなしに無造作に前提されているかのようである。果たしてそうだろうか。第一版では、カントは演繹の本論に先立つ節で、読者の理解を容易にすべく準備的な説明を行なっている。「三段の総合」で知られるこの箇所は、カントが自己意識の概念をいかんして導出(厳密な証明によるものではないにしても)しているかを見る、格好の部分であると思われる。一方で、この箇所はさまざまな要素が整理不十分なまま並べられ、叙述に混乱が見られるように思われる箇所でもある。本稿では、この自己意識導出の過程と、加えて、直観的表象の成立と判断の関係を中心に、三段の総合を検証してみたい。

1 「再生の総合」が可能であるための条件

感性的直観によって与えられる多様を、我々認識主観は一挙に知覚するわけではない。一瞬のうちに与えられた多様は単なる雑多であって、決して表象にはならないだろう。そのような多様から一つの表象が生じるには、我々に多様な印象を時間のうちで順次受けとり、それらを結合して統一する総合のはたらきがなくてはならない。カントはこれを「直観における覚知の総合」と呼ぶ。この総合は総合である以上、感性に属する働きではない。

覚知の総合はだが、先に取り入れられた印象を再生する働きを前提する。諸印象が時間とともに消失してしまったのでは、相前後して受けとられた印象を結合することができず、したがって一つの表象は生じないだろうからである。この再生作用をカントは構想力(再生的構想力)に帰し、この総合を「構想における再生の総合」とした。この作用で構想力は「連想」を原理とするが、連想は現象に現実にある合法則性があることを前提としている。

再生の総合が可能であるためには、もとの印象とその再生されたものとの同一性が保証され

ねばならず、そのためには印象を再生する認識主観の側の、その過程を通じての同一性が必要である。「概念における再認の総合」と名づけたこの作用を可能にする条件として、カントは意識の同一性を導入する。超越論的統覚の概念が示されるこの再認の総合の箇所は、三段の総合の中でもとくに重要と思われる。そこで、ここでは議論を少し詳しく追うことにする。

「我々が考えているものが、まさに我々が一瞬前に考えていたのと同じものだ、という意識が無ければ、表象の系列におけるあらゆる再生は無駄になるだろう。」(A103)¹

この節で最初に「意識」という語の出る文である。再生された印象と新たな印象とが識別されなければ、すべてがその時々を得られた新たな印象であると同じで、再生は成り立たない。この主張は一見したところ、問題無く受け入れられる。ただし、ここでいう「意識」がどのような意識か、また、いかにして印象の同一性の確認がなされるか、は、ここではまだ不明である。前者に関していえば、これが対象に向かうだけの意識なのか、反省的な自己意識の性格を持つ意識なのかが、この短い説明ではわからず、また「我々」が特に意味の無い主語なのか、あるいはここにすでに自己言及が含まれているのかも判然としない。後者については、これが判断ではなく判断成立前の、直観的表象の成立の局面を述べていることを考えると、果たしてどのような説明が可能なのか、疑問である。二つのものの同一性が確認できるからには、そのそれぞれについて既に何らかの認識があると考えられるからだ。

カントは上の部分に続けて、この意識が再生の総合に必要な統一を与える、とも述べている。また、その総合の統一の意識の中でのみ、概念は存立し得る、とも言う。

「というのも、この一つの意識が、多様なもの、次々に直観され、そしてまた再生されたものを、一つの表象へと統一するものだからである。この意識はしばしば微弱で、我々はそれを働きの結果において、だがその作用自体においては、つまり、表象の産出と直接には、結びつけないということもありうる。」(A103ff.)

対象意識が当の対象を意識してはおかつ微弱だということはある。また、対象意識を表象の統一の作用に向けることもありえない。ここで、「意識」とは「自己意識」を伴うそれを指していることが読みとれる。ならば、遡って、最初の引用にあった意識も、意識が総合に必要な統一をもたらす、という表現からして、自己意識を伴うものと考えてよいだろう。カントはさらに、「それ[意識]なしには、概念、そしてそれとともに対象の認識も、まったく不可能になるだろう」(A104 []内は筆者補足)とも述べている。先の引用部は(少なくとも表面的には)直観的表象の成立の条件としての意識を述べたものであるのに対し、この引用部の意識が認識との関わりで述べられているのは明らかである。そして、以降の段落で、カントは超越論的対

¹ 『純粹理性批判』からの引用は文中()内に慣例にしたがって示す。

象の概念を導入し、それに対応するものとして超越論的統覚を提示する。この超越論的統覚があらゆる経験に先立ち、それを可能にする条件とされるのである。

カントの議論を整理すれば、次のようになる。我々の直観は時間にしたがう。異なった時点に得られた諸印象を統一して一つの知覚表象にするには、先行する印象を保持、再生して新しい印象と結びつけなければならない。ところが、再生が意味をなすには、再生された印象と元の印象の同一性が保証されねばならず(別のいい方をすると、再生された印象がまさに再生されたものと確認されねばならず)、そのためには時間を通じて同一の自己意識が必要である。この意識が、とりも直さず、経験を可能にする原理である。

問題は2つある。(1)カントは意識を自己意識の性格を持つものと前提しているように見える。そのとおりだとしたらそれは認められるか。違うとしたら、その導入に際して論拠は示されているか。(2)カントは知覚表象成立の局面から、断わりなしに認識成立の局面に移行している。これは議論の必然的な展開だろうか。もし(1)で意識の自己言及的性格を認め、(2)で認識の局面を論じることを認めれば、カントの議論は大方認められるだろう。だが、その場合には、「三段の総合」の議論自体が無用の長物化する。カントがこの節で見出したのは、経験を可能にする原理としての超越論的統覚、つまりア・プリオリな自己意識である。(1)(2)を認めるということは、経験(認識)の局面で自己意識を前提に議論をする、ということになり、それならば三段の総合に触れなくても構わないはずである。(1)(2)が否定されるなら、それぞれを議論に沿って、新たな前提を加えること無く、導き出さなくてはならない。さらに、上の2つと関係があるかもしれない問題として、(3)再生印象の同一性確認の可能性をどう説明するか、も検討を要する問題である。

2 対象概念と意識の同一性

カントは「覚知の総合」「再生の総合」では「意識」という語は用いてはいない。だが、知覚が意識でないことはありえないから、ここでも意識は前提されているはずである。この意識をとりあえずは自己意識を伴わないものとして、そこから自己意識が帰結するかが問題である。

出発点は、再生の総合を可能にする条件であった。足し算をするのに、足すべき数を片端から忘れたのでは、和は得られない。足し算の間、先行する数を保持する心の働きが最低限必要で、つまり、この間同一であり続ける意識がなくてはならない。では、意識の同一性はどのようにして保たれるのか。また、ここでは同時に、元の数と再生された数の同一性も確認されなければならない。それはどのようにして可能か。

もし、元の印象とその再生されたものの同一性が先に与えられていれば、両者の同一性を知り得る意識は同一でなければならないだろう。だが、その両者の同一性を前提にすることはできない。そもそも、両者の同一性が言えるには、それぞれを何らかの仕方で規定できるのでなければならないが、それがそもそも可能であるか否かは、ここではまだ分かっていないのである。同一の意識がなければ対象表象も不可能であり、概念も、したがって対象認識も不可能であると述べたあとで(ここではだから、概念は表象を前提とすると考えられているのだが)、カ

ントは表象の対象という概念の意味を改めて説明する。

カントによれば、表象の対象は、感性的直観を通じて与えられる以上、それ自体何であるか、どうであるかは我々には不可知であり、「何かあるもの=X」でしかない。したがって、対象そのものとその表象との一致をもって正しい認識とするのは、もちろん不可能である。だが一方、我々が対象に言及する際、「我々のあらゆる認識のその対象への関係についての思考には何らかの必然性が伴う」(A104)。同じ対象について、その時々まちまちの規定がなされたとしたら、それは特定の対象の規定ではなくなるだろう。ところで、再生は構想力の働きであった。ある表象がしばしば他の表象と相次いで、または他の表象を伴って生じると、ついにはその一方から不在のもう一方の表象が産出され、両者が結びつけられるようになる。この経験的な「再生の法則」(A100)をカントはまた、「連想」とも呼んでいる(A121)。綜合一般は「それなしには我々は総じて決して認識を持ち得ないであろう」(A78=B103)ものだが、同時にそれは「構想力の、心の不可欠の機能ではあるが盲目的はたらき」(ibid.)にすぎない。再生が連想によるものであるかぎり、ある表象にどの表象を結びつけるかは、まったく偶然的であり、そのような表象には何の必然性も一貫性もないだろうだから、ここには何か対象と表象との結合に必然性を付与するものがなくてはならない。

綜合的統一が単なる連想によって行なわれるのではなく、何らかの規則にしたがう場合、その綜合には必然性があると考えられる。そして、その規則となるのが、カントによれば、概念なのである。カントによれば、連想も、現象が現実にもそのような規則のもとにあるということをも前提にしている。ある事象Aに続いて事象Bの生じる頻度が、他の事象の頻度より高くなければ、AB間の結合は生じないだろうからである。「この再生の法則は、しかし、次のことを前提している。つまり、現象自体が現実にもそのような規則のもとにあり、現象の諸表象の多様において、ある特定の規則に応じて、随伴や継起が生じることを」(A100)。もし現象のうちに規則性が無かったとしたら、構想力は「死んだ、我々自身に知られない能力として我々の心の中に隠されたままであり続ける」(ibid.)であろう。構想力が概念を規則として表象を産出するなら、同じ概念に対しては同じ表象が対応するという一貫性は得られ、そういう意味でその綜合はある種の必然性をもつ。カント自身の例によれば、「我々は、それにしたがってそのような[三角形の]直観がつねに提示されるような規則にしたがって3つの直線を構成することを意識することによって、三角形を対象として考えるのである」(A105 []内は筆者)。この綜合によって我々は「表象における多様なものの綜合の意識における形式的な統一」(ibid.)を得るであり、「我々は直観における多様なうちで綜合的統一をもたらした場合に、対象を認識する」(ibid.)。再生の綜合に必要な同一性は、このように、再生印象と元の印象のそれではなく、綜合の結果生じるべき概念への、各表象の適合性ととらえなおされるのである。一見唐突に見えるこの転換は、カントの認識論の前提からみれば、理由のないものではない。つまり、判断作用なくして一つの表象の成立はありえず、したがって、表象に統一される以前の諸印象については、直接その同一性や差異を比較することはできない、ということである。引用中に見られるように、この綜合は自己意識を伴うものと考えられている。

3 超越論的統覚

概念を規則とする表象の統一が、すなわち意識の形式的統一である、という結論を受けて、カントは次のように言う。

「あらゆる必然性にはつねにその根底にある超越論的条件がある。したがって、我々のあらゆる直観における多様なものの綜合のうちに、よってまた客体の概念一般のうちに、したがってまた経験のあらゆる対象のうちに、つねに意識の統一の超越論的な根拠がなくてはならない。」(A106)

この「意識の統一の超越論的根拠」は、超越論的統覚に他ならない。

こうして「超越論的統覚」の概念が導入される。カントは、経験的統覚と超越論的統覚を対比させつつ、

「内的な知覚における、我々の状態の規定にしたがった自己自身の意識は単に経験的で、つねに変化し、常住不変の自己は内的現象のこの流れの中にはありえず、これは通常内感、あるいは経験的統覚と名づけられる。数的に同一であると必然的に表象されるべきものは、そのような経験的なデータによって考えられることはありえない。それはあらゆる経験に先立って、経験自体を可能にするような条件でなくてはならず、この条件がそのような超越論的前提を妥当なものにするのである。」(A107)

と述べる。意識は経験的であるとア・プリアリであるとを問わず自己意識の性格を持ち、経験的統覚に対して、経験を可能にする意識が「数的に同一」なものとして提示され、この「純粹で根源的で不変の意識」(ibid.)が超越論的統覚として、あらゆる経験の可能性の条件とされるのである。経験的概念にとどまらず、時間や空間の概念も、直観をこの超越論的統覚に関連づけることで可能になるとされる。時間や空間は直観の形式であるばかりでなく、それ自体が一つの表象であるべきものである。ア・プリアリな綜合作用の根底にあって規則となる概念は、いうまでもなく純粹悟性概念、カテゴリーである。超越論的統覚は、「心が多様なものの認識において、その機能の同一性を意識すること」(A108)により生じるとされ、したがって、「自己自身の同一性の根源的で必然的な意識は、同時に、あらゆる現象の、概念にしたがった、つまり、規則にしたがった綜合の、同様に必然的な統一の意識である」(ibid.)とされる。表象を統一して対象に関連づける作用において、その統一の根拠は感性を通じて与えられる不可知の対象側には求められないことから、意識はそれを自己に帰せざるを得ない。自己意識は自らの作用の所産を介してその機能を知ることによって生じる、反省的な意識である。カントが繰り返し行なう超越論的統覚の特徴づけに共通しているのは、この意識が認識主観の綜合作用の意識であること、認識ではなく、かといって仮象ともされないこと、である。

「この超越論的対象の純粹な概念(それは我々のあらゆる認識を通じてつねに同じ=X だが)は、我々のあらゆる経験的概念一般において対象への関連を、つまり、客観的実在性を与え得るものである」(A109)。超越論的対象の概念は、だが、特定の直観に対応するものではなく、認識における多様なものが対象との関係で考えられる際の、多様なものの統一を表現しているにすぎない。そして多様なものの対象への「この関連はしかし、意識の必然的な統一、したがってまた、多様なものを一つの表象において結びつける心の共同の機能による多様なものの総合の統一以外の何ものでもない」(ibid.)。この意識の統一が表象と対象との関連づけに客観的実在性を与え、つまり経験的認識を可能にするのだから、現象は「経験において統覚の必然的統一の条件のもとに」(A110)立たねばならないのである。

経験は、カントによれば、ただ一つであり(ibid.)、その中であらゆる知覚は一貫した合法的な関連において表象される。いいかえると、経験とは「概念にしたがった、現象の総合的統一」(ibid.)である。カントは再度経験的概念にしたがった総合は偶然的なもので、そこからは考えを伴わない直観は生じて、認識は決して生じないことを指摘した上で、こう主張する。「可能な経験一般のア・プリオリな条件は、同時に経験の対象の可能性の条件である。ところで、私は主張する。先に述べたカテゴリーは、時間と空間が直観に対して直観の条件を含むのと同様に、可能な経験における思考の条件にほかならない。したがって、それらはまた現象に対する客体一般を考えるための根本概念であり、したがってア・プリオリに客観的妥当性をもつ」(A111)。このようにして、カテゴリーが演繹されることが示される。

演繹論の本論では、カントは「三つの認識源泉」(A115)として感性と構想力、それに統覚を挙げ、それぞれに経験的使用と経験を可能にする超越論的使用を認めている。

「全知覚に対しては、しかし、純粹直観(表象としては内的直観の形式、時間)、連想には構想力の純粹総合、そして経験的な意識に対しては、純粹統覚、すなわちあらゆる可能な表象における自己自身の一貫した同一性が、ア・プリオリにその根底にある。」(A115ff)

そうして、経験の可能性の必然的条件としての超越論的統覚を確認する。

「我々はア・プリオリに、我々の認識に属し得るあらゆる表象に関する我々自身の、あらゆる表象の可能性の必然的な条件としての一貫した同一性に気づいている。」(A116)

『あらゆる異なった経験的意識は唯一の自己意識に結びつけられていなければならない』という総合命題は、我々の思考の端的に最初のそして総合的原則である。」(A118 Anm.)

再生の総合で、再生的構想力の再生の原理は、現象そのものにそれを可能にするような合法性を前提とする、と述べられていたが、それが超越論的統覚のもとにある現象の統一であることはいまでもない。そして多様なものを総合して認識にもたらすア・プリオリな能力とし

て働く構想力の総合は、再生の総合におけるそれと区別して、「構想力のア・プリオリな産出的総合」(A118)と呼ばれ、「統覚に先立つ純粋な(産出的)構想力による総合の必然的統一の原理は、したがってあらゆる認識、とりわけ経験の認識の可能性の根拠である」(ibid.)とされている。

「我々は人間の心の根本的能力としての純粋な構想力をもつ。これを介して我々は一方には直観の多様を、そして、他方には純粋統覚の必然的統一の条件を、結びつけるのである。最も離れた両端、つまり感性と悟性は、構想力のこの超越論的な機能を介して必然的に関わらなければならない」(A124)。このように、構想力は経験の可能性の条件とされるのだが、「構想力による総合に関わる統覚の統一は悟性であり、この同じ統一が、構想力の超越論的综合との関わりにおいては、純粋悟性なのである」(A119)と、超越論的統覚が純粋悟性のはたらきにはかならないことが示され、純粋悟性概念であるカテゴリーが経験を可能にするものであることが確認されるのである。

再生の総合の箇所、現象の側の、構想力による連想を可能にする根拠を、カントは「親和性」(A113)と名づけているが、親和性とは取りも直さず超越論的統覚の規則のもとにあって経験を可能にする原理としてはたらく産出的構想力の総合によって秩序づけられた現象であり、そのような現象界をカントは、「自然、すなわち現象における多様の、規則にしたがう総合的な統一」(A127)と呼ぶのである。

4 議論の分岐点

概念を規則として、直観における多様なものを一つの表象へと総合し、その総合を意識することが同時に自己同一性の意識を生じさせる。このようにして、カントは自己意識を導き出すことに成功している。だが、ここで注意しなければならないのは、カントの説明が、総合の結果生じる概念に対する、結合される諸表象の適合性を述べるにとどまっていた、再生された表象ともとの表象との同一性を可能にする条件には触れていないことである。もう一つ、再生の総合を可能にする条件としての同一の自己意識は、せいぜい一つの表象をつくり出す過程を通じて同一であればよく、カントは彼のいう純粋で不変の同一性の自己意識である超越論的統覚を導き出すには至っていないことである。再認の総合を論じた箇所で、一見唐突に見える「対象」概念への言及は、どのように説明できるだろうか。

カントは、第一版への序文で、演繹論には「純粋悟性の対象に関わり、そのア・プリオリな概念の客観的妥当性を示し理解させるべき」(A XVII)側面と、「純粋悟性そのものを、その可能性と自らが依っている認識諸能力との関連において、したがって主観的な関連において考察する」(ibid.)側面との「二つの側面」(ibid.)を持つと述べている。その上で、前者が本来の目的にとって重要であり、後者の論証の成否は前者の成否に影響しないとしている。

クレメは、この二つの側面の分岐点を、演繹第2節では再認の総合に関して超越論的对象への言及がなされる直前に見ている²。つまり、再生の総合を可能にする条件として意識の同一性

² H.F.Klemme, *Kants Philosophie des Subjects*, Hamburg, 1996, S.153.

を述べた部分までが主観的側面、対象概念に関する説明以降が客観的側面に関する叙述で、カテゴリーが経験の可能性の条件であることを示して、演繹は一応完結する、ということである(もちろん、本来の演繹は次の節でなされる)。

いま、彼の解釈にしたがってみると、カントが演繹の本来の目的とした、カテゴリーの経験的对象への客観的妥当性の証明に関しては、再生の総合を可能にする条件をもれなく論じることとは必ずしも必要ではなく、再認の総合で意識の同一性を必要条件として示せばじゅうぶんだった、と考えることができる。動物や言語習得前の幼児にも何らかの直観表象はあり、それに反応して行動していると思われるが³、ここでは人間の認識の条件が問題で、そのような他の認知の仕方まで検討するには及ばない、ということである。再生された印象ともとの印象との同一性の確認についても同様である。

一方に、再生の総合の前提として要求される意識の同一性がある。これが自己意識の性格を持つか、また、再生表象の同一性はいかに保証されるか、は未決定だとする。もう一方に、対象の概念の意味を吟味することによって、経験的認識を可能にする最高の条件としてとりだされた、純粋な自己同一性の意識である超越論的統覚がある。「数的に同一」の自己意識があつて、同じ主観の経験的意識がそれに含まれ得ない(自己意識が経験的意識の内容にアクセスできない)ことはあり得ない。カントの言葉によれば、「あらゆる表象は可能な経験的意識に関わりを持つ。それがなく、それらを意識することがまったく不可能だったとしたら、それはそれらがまったく存在しないと言うのと同様だろう。あらゆる経験的意識は、しかし、超越論的(あらゆる特定の経験に先立つ)意識、つまり根源的統覚としてのわたし自身の意識に関わりを持っている。だから、私の認識においては意識が一つの(わたし自身の)意識に属することは端的に必然的である」(A117 Anm.)。これによって、超越論的統覚が再生の総合成立の条件を満たすものでもあることが示された以上、議論の目的は果たされたのである。

(いきゆきまさ 博士後期課程単位取得退学)

[キーワード]

総合 カテゴリー 意識 超越論的統覚

³ 『判断力批判』には次のような記述がある。「我々はまったく正当に類推によって推論することができる。動物もまた表象にしたがって行動する(デカルトが主張するような機械ではない)」(アカデミー版全集 V464 Anm.)。筆者はこれを以下の指摘により知った。T.Rosefeldt, *Das logische Ich*, Berlin/Wien 2000, S.13 Anm.